佐賀大学病院ニュース

News & View

— 患者さん・地域の皆さんとの絆を深める広報誌 —

SAGA UNIVERSITY HOSPITAL NEWS

〒849-8501 佐賀市鍋島5丁目1番1号 TEL.0952-31-6511（代）

病院ホームページ https://www.hospital.med.saga-u.ac.jp/

副病院長が考える、良い病院とは？

能登半島地震災害現場におけるDMATの活動
多数傷病者発生を想定した災害訓練を行いました

- 教授就任のご挨拶（耳鼻咽喉科・頭頸部外科、総合診療部）
- 病院再整備が完了しました
- 医療従事者の働き方改革について／カチ★スタ
- 看護部だより／連携病院紹介
- TOPICS

ご自由にお持ちください

No.54

2024.8

発行◎佐賀大学医学部附属病院 広報委員会

副病院長が考える、良い病院とは？

今年４月に着任した３名を含め６名の副病院長が、当院が患者さん・地域の皆さんに選ばれる病院であるために語り合いました。

病院長
野口　満

今回、６名の副病院長の方々を座談会の内容とともにご紹介いたします。病院運営の重要な役割を分担し、連携を取りながら病院を支えて頂いています。どうぞよろしくお願いいたします。

「良い病院」の条件とは？

阪　本：日本救急医学会が掲げる「**人を救うには、まず自分が健康でなければならない**」が、良い病院の条件の一つだと思います。救急の現場で職員の負担が重すぎたり、どこか１箇所に負荷がかかっていたりするといい結果が出にくい。

人が補充される、給与に反映されることは大切で、職員の幸せ度が上がれば、それは患者さんや地域の皆さんへの貢献にもつながると思います。近年は人員強化や給与改定など、いい方向に進んでいますね。

島ノ江：給与は６月の診療報酬改定で、若手を中心に広く見直されました。

宮之下：看護の方では看護補助者の手当が先行して改善され、みんな喜んでくれました。ただ幸せ度と言われると、環境や人間関係も大切かもしれません。

江　﨑：卒後臨床研修担当としては、**学生や研修医にとって学びやすく魅力がある**病院が良い病院です。地方では若手医師が減り続け、佐賀もそうです。当院内科も30数名から昨年13名になり、今年は19名ですがそれでも足りません。医学部学生の半数は近隣県の出身で、地元に戻る人も多く、佐賀に残りたいと思わせる魅力が必要です。

例えば大都市では一人ひとりに分配される業務が限られますが、当院は人数が少ないので任されることが多く、学ぶ側には大きなメリットです。今まで教える医師も少ないという課題があったのですが教育センター部門が立ち上がりましたので、２、３年のうちに軌道に乗せていきます。

島ノ江：患者さんには**より質の高い医療を安心して受けられる**こと。スタッフは**部署や職種間の垣根がない**こと、**全員が患者さんの医療に対し熱い想いをもっている**ことだと思います。医薬品費は高騰し、業務は増えながら質の高さが求められ、厳しい局面にあります。

熱い想いの火種を絶やさないよう経営改善によって適切な人の確保に取り組み、機器や設備など環境も整えていきます。スタッフ間の垣根がないことはリスクマネジメントの上で重要です。私は薬剤部長で各診療科と連携しているのですが、患者さんのためという話になると皆さん同じ方向を向くのが、当院のとてもいいカラーだと感じています。

江　﨑：患者さんのため、私はむしろ各自が専門分野を軸にいろんな方向を向いている方が良いようにも思います。

島ノ江：そうなんです。患者さんの声に向けてさまざまな視点からコメントが集まって、ディスカッションできるのが非常にありがたいです。

宮之下：医療業務担当、そして看護部長として全体を見ていますが、ご意見箱にスタッフが挨拶しないなど接遇への声が寄せられることがあります。**満足のいく治療や看護が受けられる**のが良い病院だと思うのですが…。母数が多い看護師が指摘を受けることが多いので、そういった点は自然とできるようになってほしいと、看護学校や看護学科の授業の際は必ず伝えています。もちろん挨拶ができれば患者さんは満足かと言えばそうではなく、**専門資格者の仕事は力を発揮してこそ**。

逆にコミュニケーションを求めない、挨拶されるのが苦手な患者さんもいます。あまり構わないでくれという声もありました。患者さんに合わせて対応できるようになるといいですよね。

山　下：しかし廊下で挨拶したのに無視されるのは嫌ですよね。かれこれ26、7年在籍していますが、大学病院という性格上の問題かもしれないけれど、少々冷たい印象があるのは否めません。**建物が明るくなり環境が整ってきた分、次は人が動く番**です。

働き方改革は本当に悩ましくて、規則を守りつつ、医師たちに余裕を持たせるというのは難しい。本来は資源が伴って実現できる改革でしょう。そのため、私は働き方改革というのは無駄をいかに無くすかだと思っています。それを皆さんで共有し、ご協力いただきたい。例えば、人を雇用したい時は、同時に

副病院長紹介

救急医学講座　教授／高度救命救急センター長／医療安全管理室長／ Aiセンター長

実は私「麻雀が好きで、尊敬する人は雀鬼会の桜井章一会長です」

安全管理・災害対策担当
阪本　雄一郎
（さかもと　ゆういちろう）

急性期・重症病床の新体制の確立とBCP（事業継続計画）の修正を進めています。また医療安全上も重要なサイバーセキュリティの強化を医療情報部等と協力し、行政・医師会・消防機関との連携強化も課題です。佐賀県の高度医療・急性期医療の砦病院としての役割をしっかりと担い、さらなる質の向上のため尽力いたします。

内科学講座　教授／卒後臨床研修センター長／炎症性腸疾患（IBD）センター長

実は私「ワインと日本酒が好き。佐賀のお酒はおいしいですね」

卒後臨床研修担当
江﨑　幹宏
（えさき　もとひろ）

減少傾向にある県内の若手医師の確保を目指します。地域医療科学教育研究センター、医師育成・定着支援センターと連携した学生・初期研修医教育の充実、システム構築を促し、将来的には卒前・卒後研修管理を一元化へ。診療の際、医師と一緒に学生がいることもありますが、若手育成のためご協力のほどよろしくお願いいたします。

薬剤部　教授／薬剤部長

実は私「休日は大好きな夫と、音楽をかけて山道ドライブしています」

経営企画担当
島ノ江　千里
（しまのえ　ちさと）

経営に関わる各課の力を臨床の立場から支えてまいります。健全な経営体質があってこそ、よりよい医療のための環境が整うという視点で尽力します。執行部を支える人材育成、病院全体で質の高い医療とコスト削減に取り組む意識改革も並行していきます。患者さんはもちろん、地域の医療者をも支える病院でありたいと思います。

看護部長

実は私「意外かもしれませんが、朝食と夫のお弁当を毎朝作っています」

医療業務担当
宮之下　さとみ
（みやのした　さとみ）

医療業務担当、看護部長として、患者さんやご家族との関わりにおける全般を担当いたします。皆さんへ安心安全で最善の看護を提供できるよう、教育、看護の質の向上、地域との連携強化など進めてまいります。具体的には次世代の看護管理者の育成、タスク・シフトの推進、県内の看護部長同士の交流などに取り組んでいきます。

どう集めるかも考えることです。

中期計画も同じで**皆さんの協力**が必要です。私の仕事も、事務の方が多様な資料を準備してくださってやっと成り立っています。本当に感謝しています。

北　島：事務方で山下先生と一緒に働き方改革に取り組んでいます。担当職員はだいぶ補充できましたが、医師一人ひとりの勤務状況を追う業務なので、人手はもっと欲しいですね。

年に１度、外来と入院患者さんを対象に満足度アンケートを行っています。これまで受付や支払い、診察などの待ち時間にご指摘がありましたが、外来呼び出しシステムが導入されて自分の番が**可視化**されたのが影響したようで、今回少し改善されました。引き続き、**事務方でできることを考え、患者さんの信頼へ**とつなげていきます。

佐賀大学医学部附属病院の好きなところ

宮之下：良い病院であるには、私たち自身ここが良いところと気づくことだと思います。看護学生にも言いますが、私が30年以上働き続けられているのも根拠の一つ。だから人に勧められるし、学生に選ばれる大切な点かと思います。**佐賀大学医学部附属病院への「愛着」**があること。だからこそ改善が必要なところは、しないといけない！

島ノ江：私は医薬品安全管理責任者で、適正な薬物療法を「厳しく管理」することにもなりますが、診療科の医師から「医療者も守ってくれてありがとう」と言われた時は涙が出そうでしたよ。また、各診療科で、病院全体のためにこう変えていきたいと話すと、いろいろな意見を出してくれます。**皆さん良い病院にしようという思いがあり、それは何より患者さんのため**なのです。

山　下：私は自分の性格と大学の波長が合って選びました。見学や研修などで他所も見てきましたが、当院は良いところがたくさんある。大都市の大学病院では医局員も多く、専門性が求められます。がんに強い、外傷に強いなどスペシャリストが育っていきます。だけど私は口腔外科領域の全てをやりたかった。他の診療科では違うかもしれないが、口腔外科で全ての診療ができるのは地方です。口唇口蓋裂も、がんも、顎変形症も、さまざまな患者さんが来られます。**自分の求めていたスタンスで好きな仕事**をしています。

阪　本：高度救命救急センターはいろんな診療科の方と話す機会が多いのですが、私も診療科間の垣根は低いと思います。それに新型コロナウイルス感染症の流行時、重症患者さんは全員うちに運ぶことになって負担が大きかったのですが、スタッフはあまり文句を言いませんでした。**実直な人が多く、決まったことをしっかりやる**。そこが好きなところです。だからこそ、ちゃんとしたルールを決めることが大切だと思います。

江　﨑：大学病院として規模が小さいのは、**診療のしやすさ**にもつながっています。他の大学病院ではCTは１、２ヶ月待ち、MRIは３ヶ月待ちで、患者さんに他所の病院へ撮りに行ってもらうこともあります。当院は診療科間の距離が近く、**職員さんがやさしい**。消化器内科も素直な方が多いですよ。佐賀に来て７年、だいぶ愛着が湧きました。

北　島：私も**やさしい先生が多い**と思いますよ。昭和58年から勤めており、当院のさまざまな変化を見てきました。「患者さんに選ばれる病院」に近づいていると感じています。

歯科口腔外科学　教授／MEセンター長／医師労務管理室長

実は私「犬を飼いたいのですが、子どもの独立まで辛抱しています」

働き方改革・中期計画担当

山下　佳雄
（やました　よしお）

「医師の働き方改革」に向け2022年度より準備をしてきました。健康で安全な職場作りを目指し、医師の勤怠管理を行う医師労務管理室も立ち上げました。本改革では医師以外の全スタッフの負担軽減にも取り組んでいます。病院の在り方も少しずつ変化しています。医療職だけが特別な職業ではないこともご理解いただけたら幸いです。

事務部長

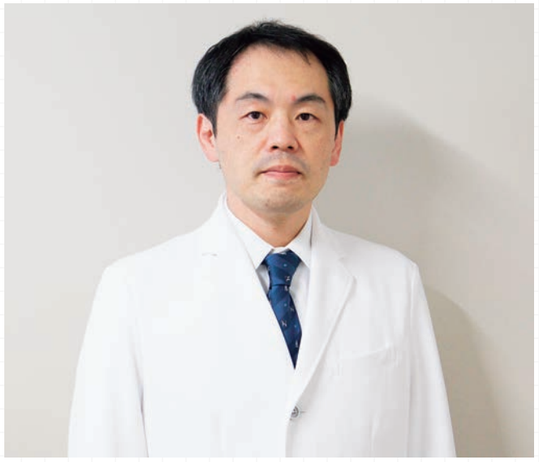
実は私「家庭菜園を十数年やっています。定年後はハーレーダビッドソンに乗りたいな～」

管理運営担当

北島　博文
（きたじま　ひろふみ）

適正な人員配置やコスト管理、管理運営の充実を図る企画立案など、病院長の職務を補佐する役割です。病院の再整備も終了し、収支状況を見据えてさらに健全な病院運営を進めていきます。当院は、「患者さんに選ばれる病院」を理念に掲げています。そのため職員一団となって努力していますので、どうぞ安心してご来院ください。

教授就任のご挨拶



座右の銘　一歩ずつ着実に

杉山（すぎやま）　庸一郎（よういちろう）

耳鼻咽喉科・頭頸部外科学講座　教授

2024年２月１日より耳鼻咽喉科・頭頸部外科学講座の教授に就任しました杉山庸一郎と申します。出身は静岡県です。京都府立医科大学を2001年に卒業した後、同耳鼻咽喉科・頭頸部外科学教室に入局し、耳鼻咽喉科医としてのスタートを切りました。大学院修了後は、米国ピッツバーグ大学に留学し、帰国してからは京都府立医科大学耳鼻咽喉科・頭頸部外科学教室で喉頭・頭頸部外科を中心に臨床を行いながら、嚥下に関する基礎研究を中心に研究も続けて参りました。

当講座は日本耳鼻咽喉科頭頸部外科学会専門医７名を含む12名で、臨床・教育・研究に一丸となって取り組んでいます。頭頸部がんを含む腫瘍性疾患に対する治療、音声・嚥下障害、気道狭窄に対する治療、鼻科学、耳科学分野も含めて様々な疾患に対応することが必要な診療科ですが、それぞれの分野のスペシャリストが高いレベルの医療を提供できる体制を構築しています。さらに教育にも重点を置いており、各領域の指導体制も充実しています。また当講座は耳鼻咽喉科において嚥下障害に関する基礎的な研究から専門的な臨床まで体系化した日本で初めての講座の一つでもあります。

高い専門性を活かして地域医療に貢献するために、臨床・教育・研究活動に尽力して参ります。今後とも宜しくお願いいたします。

座右の銘　継続は力なり

多胡（たご）　雅毅（まさき）

総合診療部　教授

2024年３月１日より附属病院総合診療部の第四代教授に就任しました多胡雅毅と申します。私は佐世保市出身で、1999年に旧 佐賀医科大学に入学して以降、一貫して本学でキャリアを積んで参りました。本邦の国立大学で最も歴史のある総合診療部を運営することに、大きな喜びと責任を感じております。

当院は県内唯一の大学病院で、高度急性期医療の砦でもあります。当科の使命は、当院の機能と佐賀県の地域医療を守ることであると考えています。当院の救急医療と専門診療科を支え、地域の病院で診断が難しい患者さんを、丁寧な病歴聴取と身体診察によって診断し、治療します。さらに、診断が不可能な患者さんに寄り添い、問題解決の支援を行います。また、県内の市中病院に設置している佐賀大学医学部附属病院 地域総合診療センターに総合診療医を配置し、そこで総合診療教育を行い、佐賀県の地域医療体制を充実させて参ります。

当科では大学病院の一診療部門として、研究と教育にも注力して参ります。アカデミックホスピタリストを多数育成し、佐賀大学、佐賀県、総合診療医学の発展に貢献して参ります。

皆様、引き続きご支援を賜りますよう、どうぞよろしくお願い申し上げます。

左より
小網 博之 医師
古賀 恵一 看護師
内田 和成 看護師
竹内 耕治 薬剤師

能登半島地震災害現場におけるDMATの活動

2024年１月１日、能登半島地震が発生しました。当院では、厚生労働省からの要請を受け、佐賀県からの第１陣としてDMATを現地に派遣しました。

※DMAT：災害派遣医療チーム（Disaster Medical Assistance Team）を略してDMATと呼ばれており、「災害急性期に活動できる機動性を持ったトレーニングを受けた医療チーム」と定義されています。

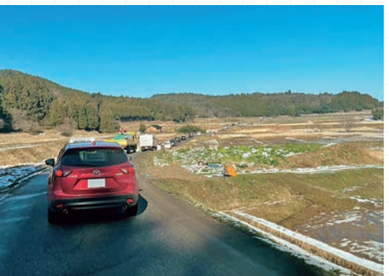
活動報告

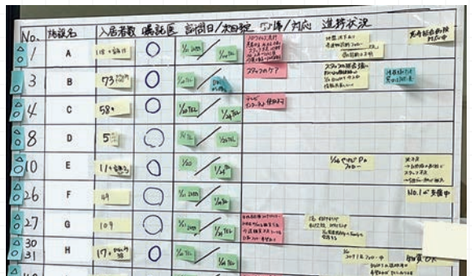
救急医学講座　准教授　**小網　博之**

能登半島は私が生まれ育った場所であり、故郷で起こった大震災に、救急医として少しでも役に立てればとの思いでDMATに志願しました。１月16日に、当院DMAT（他に、看護師２名、薬剤師１名）が佐賀県で最初のDMATとして陸路佐賀を出発しました。

17日には穴水町保健医療福祉調整本部に入りました。途上は、道路はいたるところでひび割れや通行止めがあり、多くの災害派遣の車両による渋滞もあり、移動に通常の倍の時間を要しました。現地では、調整本部内の施設班として、穴水町内にある高齢者施設などのライフラインの状況把握や不足物資の補給、入所者や施設職員の医療需要の把握、施設避難などを行いました。さらに、石川県庁とのタテの連携と、調整本部内で朝夕の会議を通してヨコの連携を築きながら本部活動を続けました。特に印象的だったのは、施設のインフラはそれなりに充足していたのに対して、災害派遣された各隊による頻回の介入が、逆に施設の日常業務に影響を与えているケースが複数あったことです。複数の災害派遣チームが現地で活動する中で、いかに被災者・被災地に負担のかけない介入を行うことが重要かを痛感し、フェーズに応じた災害医療の需要の変化に対する今後の課題であると感じました。23日に活動を終え佐賀に無事帰還することができました。最後に、情報収集や事前の準備などに対し、当院総務課をはじめ各部署のサポートをいただいたことにこの場を借りて深謝いたします。

▼（左）（右）途上の様子　（中央）ホワイトボードで施設の状況を把握





EICU 副看護師長　**古賀　恵一**

私自身現場が初めてで不安もありましたが、現状を目の当たりにし、「自分に出来ることを」の一心で活動したことを覚えています。また、断水が続いており、感染症が流行し始めている時期でもありました。私達は決まった期間の滞在でしたが、現地では今でも元の生活に戻れていない方も多いと報道されています。普段の生活が出来ることに感謝し、経験したことを日々の業務に活かしたいと思います。

ECU 看護師　**内田　和成**

施設職員とコミュニケーションをとる中で「何をお願いできるのか」、「どうしたらいいのか」などの発言がありました。DMATとしてできること・今後もフォローしたいことを伝え、施設間移動の調整や食料・日用品の配達などを行うことができました。地域が通常通りの体制に戻るよう支援していく段階であったため、行政など他機関と協力していく関わり、地域の医療関係者の助けになる活動が必要だと感じました。

薬剤部 試験研究係長　**竹内　耕治**

石川県穴水町の活動拠点本部において、主に高齢者施設の支援を行いました。支援活動の中で、様々なチームや組織が並行して同様の情報収集を行っていたり、本部からの指示が口頭であったりしたため、収集する情報に齟齬が生じた事例を経験し、被災地での情報共有の難しさを痛感しました。後方支援いただいた院内スタッフの方々、薬剤部員に感謝申し上げると共に、今後の活動に繋げていきたいと考えます。

◀穴水町保健医療福祉調整本部での様子

▶施設避難のために入所者を搬送する様子

４月30日、当院DMAT及びDMATロジスティックチームへ厚生労働省より感謝状が贈られました。

DMATロジスティックチームとは、都道府県庁や被災地域に設置される医療活動本部業務において、情報収集・分析や医療チームの指揮調整などの本部活動を行う専門のチームです。当院からは2名派遣され、石川県庁内の石川県保健医療福祉調整本部での本部活動およびDMATと同じく穴水町の保健医療福祉調整本部の本部活動支援を行いました。

感謝状

▲DMATロジスティックチーム
（左）蒲地 俊介 看護師
（右）木庭 真由子 医師

多数傷病者発生を想定した災害訓練を行いました

2024年２月17日、当院において４年ぶりとなる災害訓練を行いました。訓練の想定は、豪雨災害による土砂崩れにより25名程度の傷病者が発生し、当院へ傷病者の受け入れ依頼が入ったというものです。訓練においては、院内の指揮系統の確立を目指して、実際に以下の項目を行いました。

・災害対策本部、診療エリアの設置
・呼び出しを含む各診療科応援による傷病者受け入れ
・入院病床の管理
・中央診療部門の診療支援活動

学生・職員による模擬患者さんにも協力いただき、病院到着から診療、手術や入院までの流れを実際に行いました。当日は佐賀広域消防局の皆さまにも現場診療から搬送、ご講評までご協力をいただきました。佐賀県の災害対策における砦の病院として機能できるよう、今後も訓練を重ねたいと思います。

病院再整備が完了しました

▲ドクターヘリ用ヘリポート

▲正面玄関

▼１Ｆ待合ロビー

▼外来診療棟の南側

佐賀県下唯一の特定機能病院である当院は、開院以来地域医療の中心を担う「最後の砦」として地域医療に取り組んできました。より一層地域医療へ貢献し、質の高い医療の提供を確実に行っていくために、2012年より附属病院再整備事業を実施してまいりましたが、この度、2024年３月をもって無事に再整備事業が完了しました。

再整備スタート初期は、病院機能の拡充及び既存建物改修の準備のために新棟（南診療棟・北病棟・診療支援棟）を建築しました。南診療棟には、高度医療に対応することを目的とした高度救命救急センター、集中治療部門、手術部門、ドクターヘリ用ヘリポートを設置し、最先端の高度医療体制を整備するとともに、北病棟にはより広い病室を設置し、療養環境を向上させ、診療支援棟には病院内の各診療支援部門を集約し、病院機能全体を支える体制を整えました。

これに続き2014年度後半より、既存の東西病棟の改修がスタートし、2015年に西病棟、2017年に東病棟が完成し、病棟部門の整備が完了いたしました。これにより病室の拡大や特別室専用病棟新設を行い、療養環境が大きく向上するとともに、こどもセンター等の各部門が連携した医療を提供可能な体制が確立されました。また、同時期に実施した中央診療棟の改修工事に合わせ、放射線部等の各中央診療部門へ最新医療設備を整備し、県内唯一の特定機能病院としてふさわしい医療体制を整えることができました。

最後となる外来診療棟の改修工事が2018年にスタートし、病院の正面玄関が位置する南側は一面ガラス張りの開放的で明るい空間が生まれ、来院されたすべての方にとってやすらぎのある施設となりました。

再整備期間中は、長きにわたり色々とご不便をおかけしましたが、地域医療の中心を担う「最後の砦」としてふさわしい施設へ生まれ変わりました。今後もより一層地域医療の中心としての役割を果たしていきたいと思います。

▲北病棟

▲南診療棟

▲病棟特別室

▲３Ｆラウンジ

▲こどもセンターのホスピタルアート

▲院内ギャラリー

医療従事者の働き方改革について

当院では、2024年４月からの「医師の働き方改革」に対して、次のようなことに取り組んでおります。

【業務分担・効率化】

○交代制勤務・チーム医療（複数主治医制）の導入
○特定行為研修修了看護師の育成・確保
○臨床実習コーディネーターの採用
○医師事務補助作業者の体制強化、業務内容の検討
○外来クラーク・病棟クラーク・看護補助者の増員

【診療活動の適正化】

○入退管理システムを用いた勤怠管理
○各種業務のICT化による負担軽減の推進

【子育て中の職員への配慮：復職支援】

○短時間勤務制度の活用
○院内保育所（夜間保育等）の提供

病状説明等に関するお願い

当院職員から患者さんやご家族への病状説明等は、原則として平日の診療時間内に限らせていただいております。医療スタッフの健康と医療安全を守るため、また診療の質の向上・維持のため、患者さんとご家族の皆さんのご理解とご協力をお願いいたします。

▲当院HPにも働き方改革への対応について掲載しています

産科婦人科担当
村田 啓子 さん

循環器内科担当
千々岩 佳穂 さん

カチ★スタ

当院で輝く スタッフを紹介！

第２回：メディカルアシスタント

医師の事務作業をサポートする、メディカルアシスタントとは？

●どのような仕事をしていますか。

（村田・千々岩）診療予約変更やカルテの代行入力、診断書の作成補助、医療の質向上に資する事務作業として手術症例データベースへの登録、入院案内などを行っています。

●メディカルアシスタントとして働き始めたきっかけは。

（村田）医療系の仕事は未経験でしたが、医事課で働き始め、病棟クラークを経て今に至ります。

（千々岩）面接の際に、医師や看護師をサポートする「病棟クラーク（現：メディカルアシスタント）」として働きませんかとお誘いがあり、お受けしました。初めは医療用語やカルテの見方が難しく、カルテを読み解く力も必要でした。現在もわからないことは調べ、メディカルアシスタントや他職種の方々に相談しながら日々勉強しています。

●仕事をしていてやりがいを感じることは。

（村田）事務の目線から気づいたことを医師に伝え、感謝されたことです。また、一緒に働く医療従事者の皆さんがすばらしく、不安を抱えた患者さんが「またね」と柔和な表情で退院される姿を見てきました。そのような現場に携われることもこの仕事の醍醐味です。

（千々岩）医師や他職種の方から依頼事があると、任せて頂いているのだと自信にも繋がりますし、やりがいを感じます。役に立てたと実感できた時はとても嬉しいです。

看護部だより

当院では、熟練した看護技術と知識を有し、日本看護協会から認定を受けた「認定看護師」が活躍しています。

小原　萌恵
（緩和ケア認定看護師）

●仕事内容を教えてください。

血液・腫瘍内科に所属し、治療の選択、心身・社会的な立場の変化、がんによる症状など様々な苦痛を和らげ、がん患者さん・ご家族の力を引き出し、その人らしい生き方や希望を支えるための専門的緩和ケアの実践、スタッフの支援を行っています。

●認定看護師を目指したきっかけは何でしょうか。

患者さん・ご家族と出会い、がんと向き合うことは容易ではない現実を目の当たりにしました。「看護師は地獄の中の仏」と言い亡くなった患者さんの言葉、傍にいることが看護だと教えてくれた患者さんとの関わりから看護の可能性に希望を抱き、緩和ケア認定看護師を目指しました。

●仕事への意気込み、思いなどを教えてください。

学び続ける姿勢を大切にし、いつでも相談しやすい場を作ることができるよう、人間性を高め、心豊かな認定看護師を目指します。

中島　雅典
（感染管理認定看護師）

●仕事内容を教えてください。

ICTラウンド（※1）に参加し、病棟全体の感染対策の遵守状況を確認しています。また、ICUに勤務しているので、南診療棟（ICU、EICU、ECU）で新規耐性菌が検出された際には、適切な感染対策を実践しています。

※1　感染制御部を中心とした、感染対策の実施状況を把握するための病棟巡回

●認定看護師を目指したきっかけは何でしょうか。

病棟における感染対策係やリンクナース（※2）として感染対策に携わっていく中で、スタッフより感染対策についての助言を求められていましたが、戸惑うことも多く知識不足を感じたことがきっかけです。重症患者さんが多いICUでは感染対策が重要であり、専門的な知識を学びたいと思いました。　※2　院内の専門チームと病棟看護師を繋ぐ役割をもつ看護師

●仕事への意気込み、思いなどを教えてください。

認定看護師として感染対策に従事するだけでなく、今後、特定行為研修修了看護師として、医師の指導を受けながら活動の場を広げていきたいと思っています。

連携病院紹介

山元記念病院

理事長　山元　謙太郎

当院は、『地域住民に密着した病院として、地域医療の向上と予防医療・福祉に貢献する』をモットーに、伊万里市と有田町で構成する西部医療圏の中核病院として地域医療を担っております。看護の質を上げるための看護師特定行為研修も県内では早々に導入いたしました。国際色も豊かで、中国からの臨床修練医の導入、フィリピンからの経済連携協定の看護師、ミャンマーからの介護福祉士、スリランカからの技能実習生を導入し、多民族共生の社会も目指しております。また、地域の人材で地域の医療を守ることも必要なため、中高生の医療体験セミナーなどを毎年開催しております。外科及び整形外科の手術から、心臓カテーテル治療まで行えるようにしておりますが、佐賀県では唯一の医師少数区域でもありますので、佐賀大学と連携して地域医療を維持していきたいと思っております。

▲クラウドファンディングを実施し、成立しました

お問い合わせ

〒848-0031　佐賀県伊万里市二里町八谷搦88-4
☎ 0955-23-2166（代表）

TOPICS

1/4 2023年度病院長賞

当院では、医療・看護技術等の向上に大きく貢献した職員に病院長賞が贈られています。2023年度は手術部看護師の田本勝之さんが受賞しました。田本さんは2022年に特定行為研修（術中麻酔管理領域パッケージ）を修了し、現在は医師の指導のもと週４日の麻酔管理を行っています。さらに、手術部内の勉強会や佐賀県看護協会で講演を行うなど、後進の指導においても活躍しています。

3/27 令和５年度佐賀県地域連携実務者懇話会を開催

WEB形式で地域連携実務者懇話会を開催しました。本会は佐賀県における地域医療連携を担う実務者の相互交流、情報交換を通して、県内の医療・看護・地域連携の強化、地域包括ケアの推進を図ることを目的としています。今年度は当院医事課より「令和６年度診療報酬改定について」の講演があり、参加者で理解を深めました。今後も施設の種別や職種を問わず、地域連携に従事されている皆さまのご参加をお待ちしています。

5/12 看護の日

５月12日は、近代看護教育の母フローレンス・ナイチンゲールの誕生日です。この日にちなんで「看護の日」が制定され、看護の日を含む１週間は「看護週間」です。

当院では、今年の看護の日のテーマ「さあ、看護の未来を、見つけにいこう」にちなんだオリジナルのポスターを看護師が作成し、ナイチンゲールの功績・オーラルフレイル予防といったポスターとともに掲示しました。５月12日には昼食の配膳時に「看護の日カード」を添え、入院患者さんへナイチンゲールの功績をお伝えしました。13日には当院歯科衛生士協力のもとイベントを開催し、口腔ケア用品を患者さんへ提供したり、オーラルフレイル予防について情報提供や相談対応を行ったりしました。「看護の日」が患者さんに看護の心を伝える機会になればと思います。

▲ イベントを企画した副看護師長とご協力いただいた歯科衛生士

▲看護週間ポスターのイラストを描いた日高知栄季看護師

▲メンタルヘルス・リフレッシュ・サポートで職員が制作

6/1～9 切り絵アーティストが活躍しています

医学部先端医学研究推進支援センター立石洋二郎さんが、佐賀大学美術館で切り絵アートの展示「シルエットの光と影」を行いました。切り絵アートの制作は心が落ち着くと言われており、立石さんは切り絵アートを医療分野に役立てることができないかとの考えから、当院職員を対象に切り絵を教える「切り絵アートによるメンタルヘルス･リフレッシュ･サポートの試み」も行っています。

佐賀大学医学部附属病院

〒849-8501　佐賀市鍋島5丁目1番1号　TEL.0952-31-6511（代）
病院ホームページ https://www.hospital.med.saga-u.ac.jp/

発行　佐賀大学医学部附属病院 広報委員会

外来担当医、開設日はこちら

よろしければ読者アンケートにご協力ください

佐賀大学病院ニュース読者アンケートはこちら